彼岸過迄の構成、分析

田川敬太郎　　友人森本

父―――母　　妹―――田口　　弟＝松本――子ども５人、末娘宵子の死
　　：　　：
　須永市蔵　　千代子　　英国帰りの友人高木

風呂の後
田川敬太郎 は、仕事さがしに奔走
同じ下宿の森本の冒険だんに興味するが森本が不意に見えなくなった。敬太郎への手紙によると、
森本は、大連で電気公園娯楽がかりに、下宿に洋杖がある、つかってくれとのこと。

停留所
友人須永市蔵は、 退嬰主義者、母と暮らしている
敬太郎は探偵みたいな仕事がしたいと
敬太郎は、須永に叔父田口の紹介を依頼。
田口からは、ある紳士の尾行を頼まれる

報告
尾行の報告をするが、田口から尾行した紳士、松本恒三を紹介された
尾行は、田口から頼まれた、松本と田口は親戚関係で、松本には、2 人の姉がおり、一人は須永の母、もう一人は田口の細君に。

雨の降る日
須永の門前で見たあの女は田口の娘で、彼女の名は、千代子、百代子という妹と吾一という弟がいる。
松本には 5 人の子どもがいた、一番下の宵子が突然の死にみまわれる

須永の話
須永と千代子の関係について敬太郎は、書生の佐伯に尋ねた。裏事情があるという
敬太郎は須永に直接きいた
彼女は、許嫁ではない。嫁に行くはなしはあるという話
父が母の妹を田口に周旋、そして千代子が生まれた。

その後母と鎌倉の田口の家を尋ねる
叔母が高木(百代子の友達の兄)を紹介。千代子は、高木は紳士だがあなた(須永)にはそれがないと

松本の話
市蔵からの手紙、その後の千代子との関係は不明
僕と市蔵は似ているが、僕のような遊民生活は市蔵には向かない。

結末
敬太郎のはなしは冒険に始まり、須永の話でおわる
敬太郎は絶えず傍観者であった

ルソーの告白文と漱石の告白文
事実の洗い出しから、告白文へ
客観描写によるリアルな現実、客観から、内面世界の開示、単なるモノマネではなく、主観的な告白から客観的姿を観察することを重視した。

後期三部作 彼岸過迄　行人　こころ
には二つの視点がある
漱石は告白文を始める前に、その告白する人物の客観的な姿を十分描き、(第三者の目から見たその人物の客観的姿、どのような生活をおくっているか、どのような境遇にあるか、どのような運命を生きてきて、現在どのような宿命的構図の中におりこまれているか)を述べており

しかる後その人物自身による主観的な告白が行われる。
外なる世界と内なる世界、二つの世界の視点から一人の人物を立体的に描いて行き、告白文のみに偏ることの弊害を除き、告白文の健全な価値を存分に実現して行く

告白文は当人の立場ではなく、別人物になり切ることでの告白文である

敬太郎、須永の江戸川、帝釈天散歩での告白

千代子との幼い頃の思い出
二人の関係
母と鎌倉の別荘を訪ねたこと

高木という英国帰りの紳士を紹介されたこと

内容でなく形式、学問的な理論
すなわちユングのタイプ論と漱石の文学論である

ユングのタイプ論、漱石の文学論
表現は違うが内容的には類似している。

ユングの外向的、内向的性格分類
外向的タイプ
意識の構えが主として客観的要因や外的条件に向いているタイプ
このタイプは、外界の事物や出来事 、社会的な人間関係などに注意や精力を向ける傾向があり、性格的には開放的で社交的、実際的な活動を好むタイプ、反面内省力に乏しく、精神的に軽薄になりがち

内向的タイプは
意識の構えは主観的な要因や内的条件に向いているタイプ
このタイプは、精神的世界や自分自身の内面的なものに注意や精力を向ける傾向があり、性格的には閉鎖的で人付き合いがヘタで、自分の世界に引きこもりがちなタイプ、はたからみているとボーとしていて必要最小限の事務能力さえかけている場合も珍しくなく、しかしその内面の奥では、実に豊かで多彩なものが活動している。

この二つの方向どちらにも、それぞれ無限の世界が広がっているが

しかし一方の世界の住民は他方の世界の住民を理解できない

外向的人間は内向的人間を暗くて陰気でつまらない不器用な人間としか映らない

内向的人間は外向的人間を外界のくだらない出来事に捕らわれて一喜一憂を繰り返し浅薄な人間と映ってしまう

さらにユングは外向的、内向的の二分類に、さらに別の四分類を組み合わせる。その四分類とは
思考型、感情型、感覚型、直感型
の機能をいう

思考とは、意識の知的活動
感情とは、意識の感情的活動
感覚とは、現在ある事物や事象を感知する意識活動
直観とは、現在はないがやがてやってくる(あるいはかつてあった)事物や事象を予感する意識活動
この四局構造は相互関係を成している

1、外向的思考型とは、外的な客観的世界に対して思考をもって対応するタイプの人間
ーーダーウイン
2、外向的感情タイプとは、外的な客観的世界に対して感情的に応じていくタイプの人間。流行や社会的人道的な文化事業を支持、詩人
ーーゲーテ
3、外向的感覚型とは、外界世界に感覚的に対応するタイプの人間
感覚には、触覚、味覚、聴覚、視覚等、そのいずれもが無限に深めることができるほど豊かになる
ーー自分が属する世界を唯我独尊的に絶対視する審美主義者
4、外向的直観型とは、外的客観世界のうちに、未だあらざるもの、今起ころうとしているものを、直観的に嗅ぎ分けるタイプの人間
ーー政治家、企業家、ビジネスマン、賭博師、山師
5、内向的思考型とは、内面的世界、主観的な世界に思考をもって応じるタイプの人間
ーーカント、漱石
6、内向的感情型とは、内的世界に感情をもって対応しているタイプの人間。感情には、恐怖や怒り、愛や憎しみ、歓喜や悲しみ、同情や嫉妬など様々、それを極め難いほど奥深い。道徳感情ー仁、忠義、慈悲、帰依、友愛、自由、平等など、これら無限に豊かな感情世界を味わうことに没頭するタイプの人間。
ーー物静かで大人しいいつも心の中で詩的空想にひたっているような女性タイプ
7、内向的感覚型とは、これまたわかりにくいタイプの人間である。目の前の事物に注意が集中しているのであるが、必ずしも現実の姿を見ているわけではなく、その事物から発する主観的な印象ばかりを享受しているタイプの人間
ーー宮沢賢治
8、内向的直観型とは、内面世界の直感像をありありと感知する人間たちである。彼らにはそのような直観像が現実的なビジョンとして見えるのであるーー預言者、宗教家、霊媒師、内なる世界から立ち現れてくるビジョンを表現する芸術家

そのどの方向に向かっても、人間的に無限に成長でき、最高度の達成に至ることができる。近代になって人間というものに対する観察力が大きく発展し、特に近代文学によって実に

豊かで多彩で深淵な人間群像が描き出されていった。

漱石の文学論のうち、文学的内容の分類、構造とその範疇論で
四つの分類をしている。
触覚や味覚、温覚、視覚聴覚などの人間の五感に属すべきもの
ーー感覚的内容
恐怖や怒りや同感、自己感情、さらには愛などの感情が属すべきものーー人事的内容
神や幽霊や妖怪などに関する神秘的な直観に属すべきもの
ーー超自然的内容
知性や学問、概括的真理やことわざなどに属すべきもの
ーー知識的内容

この四分類を漱石はとても大事にした。これは彼にとって大きな発見であり、貴重な認識であり、以後も繰り返しこの四分類を検証発展させる作業をしている。

文学的内容が四つに分類できるとしたら、そのうちの三つー「知 情 意」を封じてしまえば、唯一残った感覚的内容にすべての意識が集中し、この感覚的内容が鮮やかに輝き上がるーー草枕

文学論を補足する意味で文芸の哲学的基礎で四分類の認識を深化させ、感覚を美の理想
人事を善の理想
超自然を荘厳なるものに対する理想
知識を真の理想
とした。
理想とは漱石にとって、人間の人格の中枢に位置するものであり、これに沿って人間は生き、これに沿って全人格を発展させて行くのだから、理想とは一人の人間の全体に他ならないのである。
この分類の中に人間の人格のすべてを収めることができると確信していた

漱石は、文学的価値として感覚や感情こそが文学的上位の価値を占めるもので、超自然や知識は文学的に見て価値の低いものと述べている

文学の命である感覚や感情を強調しようとしたら、必然的に思考や直観は価値の低い劣等機能に落ちざるを得ない。思考や直観を強調したら、逆に感覚や感情が劣等機能に落ちて

しまう。それは哲学や宗教に通じるかもしれないが、もはや生きた文学とは言えない代物になってしまう。

科学的な価値観からみれば、情などを視界の外に追放しなければ科学は成り立たなくなる。

ユングはどんな価値判断にも対応できる体系になっていて、漱石はあくまで文学的な価値という観点で述べており、全く同じ構造である

漱石の創作家の態度においては、まず主観と客観の二つの区分を立て、人間の経験がこの二つに分岐し得る。この二つの方向が、客観の方には第一に知覚があり、そのつぎにその知覚をまとめて「～である」式に判断を下す概念が生じ、最終的には客観世界の根源というべき法則にまで認識が深まって行く。
主観の方向には、まず第一に主観的な印象というものが生じ、次にそれが複雑に交差し組み合わされ「～ようだ」という一種の感性的判断を下して行く段階がくる。そして最終的には主観世界の根源に位置する象徴の段階まで認識が深まって行く。と
主観、客観両方向へ向かうベクトルは、ユングの外向的ー内向的概念に当てはまる。それによって生じる世界観の相違、世界を見る態度の相違を問題とした。

先の四分類に主観、客観両方向に向かう認識の方向性の分類を加えると、漱石の行った分類とユングのタイプ論はまさにピタリとかさなる。

ユングが臨床体験を通して練り上げた人間の性格の分類と、漱石が文学研究を通して築き上げた分類とが、全く同じ結果に至った

多少の説明の誤差はあるが

内向的性格の人間の自己告白であるのが須永の告白なのである。

彼岸過迄は様々な話しが合体して出来上がっている小説である
敬太郎の話
須永の話
千代子の話
松本の話
さらに森本、田口の話など性格や年齢、境遇や性別が異なる様々な人間の口からでた話がそれぞれがそれぞれに見た世界を吐露しあいながら、全体として一つにまとめられているという構成をとっている。